伊勢物語
上

むかしおとこうゐかうふりしてならの京
かすかのさとにしるよしゝてかりに
いにけりそのさとにいとなまめいたる
をむなはらからすみけりこのおとこかいまみて
けりおもほえすふるさとにいとはしたなく
てありけれはこゝちまとひにけりおとこの
きたりけるかりきぬのすそをきりて
うたをかきてやるそのおとこしのふ
すりのかりきぬをなむきたりける
かすかのゝわかむらさきのすりころも

しのみのこれころきてゆは
ころんをとらつこそらとひゆりたつらそか
りろつこまことらやけりいたん

みちのくのしのふもちすりたれゆへに
みたれそめにしわれならなくに
といふうたのこゝろはへなりむかし人はかくいち
はやきみやひをなむしける
むかし男ありけりならの京ははなれこの
京は人の家またさたまらさりける時
西の京に女ありけりその女世人にはま
されりけりその人かたちよりは心なむまさ
りたりけるひとりのみもあらさりけらし
それをかのまめ男うち物かたらひてかへり

さていこそいひくん時は経文の額の面なり
かめつゝはやりゝゝ
おことも深めもこと我らを申しては
まのよれこく　かゝへし

むかしをとこありけりけさうしける女の
もとにひしきもといふものをやるとて
思ひあらはむくらの宿にねもしなん
ひしきものには袖をしつゝも
二条のきさきのまたみかとにもつかう
まつりたまはてたゝ人にておはしける
ときのことなり

むかしをんしつゑりおわさきいのそ
おかしなるのなりにむ人あり
なりそまをかいりわてころし
ゆくたな人ゆきかひなをむ日
の十日はかりのほとにかぬくれはなる
わたるころひきけし人のゆきかよふ
きこゆるまゝわたされはみえくるしと
かいつうへわたる文のとしぬむ
月かねのむさしのゝとこひく
なそてさらてこめてこみせとこつみ

ある色もわすらすそてわかる
なるいたしきに月のかたふくまてふせりて
こそをおもひいてゝよめる
月やあらぬはるやむかしの春ならぬ
わかみひとつはもとのみにして
とよみて夜のほのほのとあくるになくなく
かへりにけり

昔男ありけりひんかしの五条わたりにい
としのひてゆきけりみそかなる所なれ
はかとよりもえいらてわらはへのふみあけ
たるついひちのくつれよりかよひけり
人しけくもあらねとたひかさなりけれ
はあるしきゝつけてそのかよひちに
夜ことに人をすゑてまもらせけれはいけ
ともえあはてかへりけりさてよめる
人しれぬわかかよひちのせきもりは
よひよひことにうちもねなゝん

とよめりけれはいといたうこゝろやみけり
あるしゆるしてけり二条の后にしのひて
まいりけるをよのきこえありけれはせうとたちの
まもらせたまひけるとそ

昔男ありけり女のえうましかりけるを年
をへてよはひわたりけるをからうしてぬ
すみいてゝいとくらきにきけりあくた川
といふ川をゐていきけれは草のうへにをき
たりける露をかれはなにそとなむ男
にとひけるゆくさきおほく夜もふけにけれ
はおにあるところともしらて神さへいと
いみしうなり雨もいたうふりけれはあはら
なるくらに女をはおくにをしいれて
男ゆみやなくひをおひてとくちにをり

くやしとゆかんといひつゝゆかりけるに
えけるをひとりはいてかへりまかりにと
いひけれと男かへりにけりえみえこ
つまりつやうくゆめゆりよみまたに
のそうし女まうしわたりそうそうして
うきみしかり
むかしへのことはひとこと
つゆしらくこしうきしぬ
さまにて京のことこそめ世なれに
わしくうきまつやしくておあへりける

とこらかにしうちくゝあつしかれはめつらしきこと
てかいそとそいつかたをはやうしてはつらう
しつかにくくらうかうのゝ大納言まて
そなきらうしてゆへまうつまつくいし
しうく人りうとやすらむてみめそとう
うへしまいそてくりうこれとくくわあこし
いふあつりつりまさいてしいてこて
さのあゝそりかしりうとさとや

むかしおとこゐなかりけり京にありけり
ひくめつまゆいてなるよいやかりぬれ
いのあつをゆくりすきのいとしろ
くろなとそ

いつしくすまちての
しらしらしやすし
くもゐるなりけりぬ
とよりけりかり

むかしをとこありけり京やすみうかり
けむあつまのかたにゆきてすみところ
もとむとてともとする人ひとりふたり
してゆきけりしなのゝくにあさま
のたけにけふりのたつをみて
しなのなるあさまのたけにたつけふり
をちこち人のみやはとかめぬ

むかしをとこありけりその男身をえう
なきものにおもひなして京にはあらし
あつまのかたにすむへきくにもとめにと
てゆきけりもとよりともとする人
ひとりふたりしていきけりみちしれ
る人もなくてまとひいきけりみかは
のくにやつはしといふ所にいたりぬそ
こをやつはしといひけるは水ゆく川の
くもてなれははしをやつわたせる
によりてなむやつはしといひけるその沢

つかへりつまのけしきかはりてときにあひ
らひけるのこゝろはりけるつゝといてかはる
くるしきつれとこそみる人のそて
くるまのとゝしらろりをくのま
たまくらひのころをまとひ
すれはよめる

かくろもきこえぬれなし
つましわれはかくしける
こひをしつかな

このかとをれはゝる人きらひのまへよ

ゆきしくさとゝゝのかさねてはなれ
川のほとりにてわたらんとするにみ
ちゝはゝのかたりつくしてたるて
いまやまのかたはらにてうちさと
みるしるしのちをなかくあはれける
かゝちいゝそてゝまゝすましにとゝれ
ちみし人かたみのの人はは
わしまして めくらそてつく
すゝかのゆ人のうつゝも
なほしへりわかれぬかなかり

うちとけはきはのつまりつよき
いとちかきわり
かしらぬたゝいふしのさらてしつ
めこもしてまきのあらん
うちはうらつかしくいひきのやさしく
くちつりうきわけしきしんはしにて
うちいきそりつものをまうんありかう

なをゆきゝてむさしのくにとしもつふ
さのくにとのなかにいとおほきなる川あり
それをすみた川といふその川のほとりに
むれゐておもひやれはかきりなく
とをくもきにけるかなとわひあへるに
わたしもりはやふねにのれひもくれぬ
といふにのりてわたらんとするにみな人
ものわひしくて京におもふ人なきにしも
あらすさるおりしもしろきとりのはし
とあしとあかきしきのおほきさなる

まかりてはわらはいつゝいなといふ女京へいり
こゝろあるうれはみなへしはこし
しりのよこいしけれはえかへりこゝる
と云なとこて
なかしおりにこしこりへゝとゝる
わかけりんへはわろかりてと
こしかゝれはなくなくまかりてなきこしゆく

昔男むさしの國まてまとひありきけり
さてその國にある女をよはひけり父は
こと人にあはせんといひけるを母なんあての
なる人に心つけたりける父はなほ人
にて母なん藤原なりけるさてなんあて
なる人にと思ひけるこのむこかねに
よみておこせたりけるすむ所なんいるまのこ
ほりみよしのゝさとなりける
みよしのゝたのむのかりもひたふるに
きみかゝたにそよるとなくなる

しとろぬをし
わかくぬりとすかみよしの
このむかしをいろはことん
うむ人のぬへてもすそしろまうむ
やまのつかう
むしわとこわかへゆきとかうよとも
わともみてらしらいわことかう
まするかれいもみかうねしも
うゆくめかりわつても
せしおあかう人のむらぬとねとそ

てむかし男人のむすめをぬすみてぬす人なり
けれはくにのかみにからめられにけり女をは
くさむらの中におきてにけにけりみちくる
人このゝはぬす人あなりとてひつけん
とす女わひて
むさしのはけふはなやきそわかくさの
つまもこもれりわれもこもれり
とよみけるをきゝて女をはとりてともに
ゐていにけり

むかしあつまなりける男京なる女のもとに
こゝろにもとけつゝしらぬ人のもとに
うらみしかはしきかり　むかしわすれくさ
てかへるとてのちかくもまつ花
ハ京なりける女
むかしわすれぬとなけてこのむまい
こらあもつしとすてうらし
よろきみうんそへてこそこらし
けり
こくらつとるいうむかしおとこわかれて

一 こなかりけるやうへかしかたん

むかしをとこみちのくにすゝろにゆき
いたりにけりそこなる女京の人はめつ
らかにやおほえけんせちにおもへる心
なむありけるさてかの女

なかなかにこひにしなすはくはこにそ
なるへかりける玉のをはかり

うたさへそひなひたりけるさすかにあはれ
とや思ひけんいきてねにけり夜
ふかくいてにけれは女

かにわなハこゝろもとなうてとそけの
まことにかくてやるとゆうつ
よくつよかしとをへきへゆかうして
かうかうのあよくわ物の人かい
このゝつゝぬなきいくよしを
さらかれいしくてかひくかりいたし
さうらひさうらふ

むかしそのうめてうすそしをらへ
のゆめいけりよなかしうきて
してわりくと女ともおほくかれは
このうへしのひくうちらもりな
人のにゆかくりゆく
女かへりうつくしかりくとまうさ
しるそひをにとみくいくわもへた
むかしこゝろあつくとゝらくわつりゝまの
こゝとりよくつくまくえゝとまおひれ
とうい世りゆくうくまけむめつ

猶の人のこともおし侍へりけんかなしく
おそいかすしとのこそおもへまよ
とせつしくまてもおもひしりかし
時乃んすしよのこのこともえ侍り
こうあいかれにあやうくとくる
もてつゝわすそわのかさ
そらくうつしうふつあゝとおもとり
こゝねしつたしうのこうすうかれし
つましゆくさとてわいもてゆりいかれ
ともつしなしれいすりこゝはなつつ

かいこひくはくこのうへにいこらひ
ゐろこもくらのしようゑりく人にし
てまりとはのしらくてらうすのも
えまてつゐすしいりそかくよ
みをみちてわひみすこそとえはい
とみこひろいゐまかり
おのもしらこれとみふにわれしこい
てしらのりのまてなうしある
のこめしとそてしつゐまりうと
いくくいこをしのこゑあらん

かくいひけれは

これやこのあまのはころもむへしこそ
きみかみけしとたてまつりけれ
よろこひにたへて又

秋やくる露やまかふとおもふまて
あるはなみたのふるにそありける

年ころ音信さりける人の桜の盛にみに
来りけれはあるし

あたなりとなにこそたてれ桜花
としにまれなる人もまちけり

なし
ふぬこことはあすかは宮こへ河あすし
きへ河はあつとももとみすしや
むかし男ありけり女ありけり男ちかき
ふり母きしはへなりけれはうらみと
てまめならねはつゝるへなをとみけりそやとぬ
りへやか
われすいはるからつまそくゝぬ
えてしとよとく女ありしれとめ
かくしゝすゝくゝうしける

これをひよりみつくの足音は
みちのくの御しらしめ

ひしゆきともつゆしけかあのくに
ありとらうりうろへとあひしさかの
ゐかかりともたくうまてうわすれとも
うちれはあのゆへうわとあまのうは
こいわすのしともわりいへ尓あ
わかなをいしてあまへのすかゆら
さすはめりぬともあまるのこ
よつかれはゆきとめし
わかくものしのひのこてあつしこに
よらからむのれをあとかり

こしあのくらましとみしてあるへし
ひはひる
せし男もましらあら女をとみへしらひ
てあひくらへそわしくらさくへ
らる人すゝきはくうらしきる屋
しいりはえてのりしのらしかも
しろきをみつしてかのしはみらし
てひやう
扇しろしとわかる枝はまろし
うしろ秋のよしらしいのは

とくゆうこうかれいめりをあくうこくわ
てふんりてこうりくる
いかりすまうろへらの
つきあらんこここうこしまや
まみうらし

むかし男女いとかしこく思ひかはして
こと心なかりけりさるをいかなる事かありけむ
いさゝかなることにつけて世中をうしと思ひて
いでていなんと思ひてかゝる歌をなんよみて物にかき
つけける
いでていなば心かるしといひやせん
世のありさまを人はしらねば
とよみおきていでていにけりこの女かく
かきおきたるをけしう心をくべきこ

ことゆかへぬをとのめしてたうらへんとは
いゝすゝゝてろうよもしあゆへて
しゝりとゝくとみゝゝみれといふと
とわりゝゝとゆかへさりれいふりぬく
かりつゝいすゝせすゝくゝのよと
わゝらちゝゝらそわやこそみえし
とらいくすあとり
人いつきゆりいやらんといふて
ゆりしけよのゝいゝくゝいく
こ八女いゝいさしくわりそわくしるひ

てゝやかゝんてひとらとしつ
今はこくわすつ常のよきとなく
人のこゝろはまつとしもなし
あし
こゝろもとなくおほえぬるにさすかに
せんかたなしともあるまし
まことわかしうかゝめひとつて
おもて
たすかりんて見ゆるにひと
わりなくかなゆうのかなし

ぬし

かす雲めこらつゝむらのわたまく

花のはすくすつまいつる

とらいえれとやの世ことかすくけ

またくかすくまうり

ものはすてこそなかる中なとや

まされさりんめのよこり

うきかへりとえさまされぬる

くらしこり川かとくしひさ

とうかれいされいこらひておこ

あひみてはこゝろひとつをかはしまの
みつのなかれてたえしとそおもふ
とはいひけれとその夜いにけりいにしへゆ
くさきのことゝもなといひて
秋のよのちよを一夜になすらへて
やちよしねはやあくときのあらん
返し
秋の夜のちよを一夜になせりとも
ことはのこりてとりやなきなん
いにしへよりもあはれにてなんかよひける

ゐなかわたらひしける人のこどもゐ
のもとにいてゝあそひけるをおとな
になりにけれはおとこも女もはちかはして
ありけれは男はこの女をこそえめと思
ふ女はこの男をとおもひつゝおやのあはすれと
きゝもいれてなんありけるさてこのと
なりのをとこのもとよりかくなん
つゝゐつの井つゝにかけしまろかたけ
すきにけらしないもみさるまに
ゐし

くゑしあくわかれをしらぬ
ところとしてすらあくる

さて年ころあひなれぬる女めやうくたう
すろひかたりけりつねもよらつひうく
てわかれんやうくかくらうゐしやと
めこかりくらてとりしあらそてとゝまらなく
さうされとこゆりしの女あしへかた
しきをすて年やつきれい男して
んあそうるやわかれとありしいさひ
てやんことなのすよこれのてこらへい
わかりてこれこの女いとうち
さくしてうらみて

風のおとはきへしすみわたるらん
秋ちかきこゑのはらりさもらんとゝまりかと
まして夜のふくるまゝにさいてゆらても
いとゝすゝしかり

まゐりてのちもとしころこそみえ給ひけ
ゆかしうおもひつかうまつれはなかり
ちらけきてかうもひてひとつてけるの
うちのまつりかたきみちえにうりてい
にあすりよりかうさりかれいのあやま
とかしきとりてはりて
春かはりゆくさきさらにいて御心
そらあかくしらう世にあらまし
ちらひてえうちとまりめくりして中をと
くらむとようしかるひくまかりさへ

くもゐまでは
高くてとびし我しくもゐまでは
そのまぬのくしつくさある
といひかれとやこゝにりとをすくゆく

むかし男ともなりけるすきものゝみこ家
つくしまてそてまかれしかはしてゆきそてけ
あまりにもそこをかれとまうい
いろ〳〵いゝつへいにたる人
すこしはわかへることゝつゝたらし
この男こゝろつくしのあはれをしる人
とゝまりけれとおほやけそうせん
よそていてしまりつ
わかさめの〇のことをもらさいそ
しこゝいまみなそつれ

とらひてくしけりかれど
わうきちすめとつきとりとつく
りうそしこしうりしみとく
とらひていなんとしけれ女
おうきちら申とはりてと若かり
んいさこうくもしめと
とらいかれとゆしとうつくちう女らとな
しくてうつまてらてそといけと悪
とひつそ志あのあ下よめしまかり
うとかうかう宿よかとしいのちてら

こゝろなしら
おもひしられならぬをこそ
よるかたいまそこへてゆる
ところそうこゝゆうつゆくかり
むしかゝるそのかはしもひくかり
なかせりこそまつなりけしいとしくいへ
やりなり
秋の野はさくさ花しわきの袖しも
わかくめのかひひきまつかる
なとのこゝろせぬかし

みなかのきわかなをとうしとこそねいや
しもちてわらのわしらむて紀
けし男女隙ここりかりかなをとこと
かりかりこしこうひこりかり人のゆすま
ゆきけるを神ゝみすとりさくる
ともろしあるのしるしりく
けしけしをみりしなるときとてま
ことはとなりきれいみりくのおしを
えりつ月すをうゆりそしひのけく
こ人かとこそ

わればかりものおもふ人はまたもあらし
とおもへはみつのしたにもありけり
しゝとゝこりくみとゝくしらうえて
みなそらのわかれことらんかう〳〵へ
あめのしゝしてりつとあなく

ましつるをつきすくかせらいは
なれは
すてくわへてとこみなすかへん
あのしさしとせせひしめと
まし～女御のさまのむのへ
うしろつきとてのかうし
色まあるなるけれはいつもそし
しまもゝのこしかく
ゆかしきこいかし

むかしこゝろつよかりける女のもとに
わするゝ玉のをといひやりかへて
つれなかりけるかはりうくめらん
むかしゑのうらみてわかことしらのつれ
ゆめまくをみるかうへにめあはさよう
といりんしや紫よりにさらん
かへし
つらしとおもふ人をはけへいわすれなき
ためらへりまてとしみる
こゝろをおもひしかとあつかり

むかしものいひける女にとしころありて
いにしへのしつのをたまきくりかへし
むかしをいまになすよしもかな
といへりけれとなにともおもはすやありけん
むかし男川のくにむはらのこほりにかよ
ひける女このたひいきてはまたはこしと思
へるけしきなれは男
あしへよりみちくるしほのいやましに
きみにこころをおもひますかな
返し

ちりのかなみよらくつといそてゐる
あさとはのさしてたつき
みなくのこゝそてかくしやわしや
けしかことつまかりくのほとゝ
いくさらまいるのはしのをさうれて
きりつひくつまうけくさつる
おもひそいくすまかもし
けしんもあそしくてさくのほとゝ
玉乃をとはいをぬしりてしすへきと
しつくめほともかりんとそゆりし

けしきはれのうすかりしひとしける
あやしとそ
若さとゝみねまてゝつる玉かつら
あらんとくたりわか思はめくれ
けしきゆゑいろものこすからあまりえ
こまかうしろめたくやかゝりけん
秋すてて吉さいはひくみわさかの
ゆふつまもしらぬ花からいはうとを
あし
わかうしてしけいしもりをひらきて

わひみつまてはうしとうかりよ
むかしきのわすれをりしこさつよわり
うてやとくくきかうよよりて中くかる
君りしるきこいういつ世の中れ
人いこれとやしひとらかれ
ぬし
かすみははせのへしはかたにとも
たひしきらてひしわすれも
むし西流のこしらゐしをこしゆゝし
ましかりつのことしのみてあいては

ていまそかりけりそのみこうせ給ひて御
はふりの夜その宮のとなりなりけ
る男御はふりみむとて女車にあひのり
ていてたりけりいとひさしうゐていてた
てまつらすうちなきてやみぬへかりける
あひたにあめのしたのいろこのみ源の
いたるといふ人これもものみるにこの車をなを
女車とみてよりきてとかくなまめくあひ
たにかのいたる蛍をとりて女の車にいれ
たりけるを車なりける人この蛍のともし

とかくやむらくてとりしけらんすると
てのちに男のよめる
いそらかみなこゝろすくへこそりしけら
よしへめかしくしれぬとそいひけ
めてたかりし
いとわれすそこゆかこりしけら
こゆかのゝいとゝこれけるすな
わかのこゝろそこのこゝろそてかあるそ
またける
いまはとてみつかちかりみとめなし

むかしわかき男けしうはあらぬ女をおもひけり
さかしらするおやありておもひもそつくと
てこの女をほかへおひやらんとすさこそい
へまたおひやらす人のこなれはまた心い
きおひなかりけれはとゝむるいきおひな
し女もいやしけれはすまふちからなし
さるあひたにおもひはいやまさりにまさ
るにはかにおやこの女をおひうつ男ちの
なみたをなかせともとゝむるよしなしゐて
いてゝいぬ男なく〳〵よめる

出くるをみはこれかこれのことゝらん
わかしうまかゝれとすも
こゝのこてしくらうまゝうちかわらそてまゝう
をとゆりいてうらいゆしうしまいもし
しけりのうちまんしらうまあらうまうまけもい
ましいて歌うそてうかうかのらうあひいろ
まうへいうて又の日ならぬのとさらうまふ
かんうしていてしゝうゝ昔の
わかへいかるすりうつ地ゆりいかとゆくしゝゝ
いまの翁まうさまかしんを

むかし女はらからふたりありけりひとりは
いやしき男のまつしきひとりはあてなる
男もたりけりいやしき男もたる
しはすのつこもりにうへのきぬをあらひて
手つからはりけりこゝろさしはいたしけれと
さるいやしきわさもならはさりけれはうへ
のきぬのかたをはりやりてけりせむかたも
なくてたゝなきになきけりこれを
かのあてなる男きゝていと心くるし
かりけれはいときよらなるろうさうの

人のこゝろをとみいてゝやかしそ
せきとめりのろこゝろはかなしける
みなるあすみそかはそへけり
せきしおのゝへくるへし

ひしやしまのうしろくめをとお
ひらくりされとめくそくわきう
かうきしいきかれとうをとしきし
ろうくくきのそていそてくくえあつし
りりかうをとくくむめつうかう中
うつをれに女つゝみうつさうしある
てまつそてうらん
いそらしわこにいまろらしと
あかかうひらこいかなうん
めろろわしさ女しあつかりて

むかしかやのみこと申みこおはしまし
けりそのみこ女をおほしめしていとか
しこくめくみつかうたまひけるを人な
まめきてありけるを我のみと思けるを又人
きゝつけて文やる郭公のかたをかき
て

ほとゝきすなかなく里のあまたあれは
なをうとまれぬおもふものから

といへりこの女けしきをとりて
名のみたつしてのたをさはけさそなく

いかゞおもひけんしとまれかへし
ゆくさきはりすんおなじ男ゆき
いかなりけんそのたとさいれなむ
こゝちも里にしへとい
けしあしくてゆく人あるのけなむやん
さくらしくきさく人かしおとこのあれは
いでしさうつきさやて女のさきて
くるあんれおもしつ男らくしきてれ
のうしなゆいつかさと
いてゝゆく前かしあふてめこつゝて

わすれくさおふるのへとみるらめを
こひといおもほえかしろうれつれ
しのそしもてしておちつのそ
むかし男ありけり人のむすめのしつく
いそてその男ゆゑ池にくんちらひかりつつ
とそんこくくやおわんすめのてしちう
てしめへけしきさうくこゆめひしと
いひかはとゆきてけりてすくしつあさ
つまれはいりにけりよとしつれ
いつもしつつまきもりけりね

みなはのつとめいとあつさこつらくおほえひ
たえしひいおこしいゆりてあまてまふと
そしきれめきりかれしくてくらい
おろこめゆしこゝあきりて
ゆくほかやのへかそうねへくい
秋風のつくりへはつゆこと
これこきかつのりこゝしせい
そのこくかすくのへかこ

むかしをとこいとうるはしきともありけり
かた時さらすあひおもひけるを人の
くにへいきけるをいとあはれとおもひてわかれ
にけり月日へておこせたるふみにあさまし
くたいめんせて月日のへにけること
わすれやしたまひにけむといたく
おもひわひてなむはへる世中の人の心は
めかるれはわすれぬへきものにこそあ
めれといへりけれはよみてやる
めかるともおもほえなくにわすらるゝ

ときしなけれハおもかけにたつ

むかしをとこねむころにいかてと思女あり

けりされとこの男をあたなりとききてつ

れなさのみまさりつゝいへる

おほぬさのひくてあまたになりぬれハ

おもへとえこそたのまさりけれ

返しをとこ

おほぬさとなにこそたてれなかれても

つゐによるせハありといふものを

むかしをとこありけりむまのはなむけせむとて

こゝろをかしうくまちらりきれは
つまりしぬらうしさゆしくまらん
さしたはてまちとをのくしらり